

京都・顕真学苑法話
Kyoto-Kenshingakuen Collected Sermons

第二法話「お正信偈における五劫の思惟」

the second sermon

The Penetration through Wisdom for Five Kalpān in *The Verse of the True Faith and the Nembutsu*

「眞實の道とし聞けば辿りゆく一步もあわれ尊かりける」

(梅原眞隆歌集『^{なすな}薺の花』)

若葉の緑の滴るような滴翠の季節でございますが、
本日は文字通り霧雨の水滴が青葉に滴り、お足元の悪い中を、
ようこそお参り下さいましてありがとうございます。
小倉山に藤紫の花霞の掛かる頃となりました。
お経のお言葉と申しますのは、ほんの幾つかの文字の中に
無数の世界を秘めている、不思議なお言葉でございます。
父母未生以前の、お名前も忘れられた方々の、
遥かなお心の世界の痕跡は、言葉や数字、記号や美術、工芸や建築等の
形体の上に、今も生命を持つかのように立ち現れるものでございまして、
経典の研究・解釈は、数千年の長きに亘って滅びない、
御佛のお心、人のお心の眞実を顕かにするのでございます。
色も形もないお心の世界は、
言葉という、形相の中の形相によって知られるのでございます。
(註を御覧下さいまし。)

本日は、浄土真宗の私共と皆様日々読誦なさっているお正信偈につきまして、
お話させていただきたいと存じます。
浄土真宗の要となります書物とは、
申し上げるまでもなく教行信證でございますが、
その教行信證の大切なみ教えを結晶しましたものが、
この正信念佛偈、つまりお正信偈でございます。
正信念佛偈と申しますのは、教行信證におきまして
浄土真宗の根本教義が明らかにされる「行」の巻と「信」の巻の
蝶番をなすところにございまして、

更に教行信證の全巻をもまとめるものなのでございます。
また正信念佛偈のみ教えは、大無量壽經のみ教えとも一致しておりまして、
共に阿弥陀佛の本願と名號をたたえていらっしゃるのでございます。
正信念佛偈とは教行信證の中心生命であり、
その真実を顕かにする、顕真実の表現なのでございます。
この法話の経典解釈は、
梅原眞隆『大藏經講座 1 7 正信偈・歎異鈔講義』
（昭和八年五月十五日初版発行）
梅原眞隆『教行信證新釋』卷上（昭和三十年十一月二十日発行）
梅原眞隆『教行信證新釋』卷中（昭和三十二年四月十五日発行）
梅原眞隆選集『眞宗提要』（昭和二十六年一月一日発行）
梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日発行）
梅原眞隆選集『眞宗の教旨と實踐』（昭和二十九年七月廿五日発行）
に基づいております。

本日は、お正信偈の冒頭の十四句のご説明をさせていただきたいと存じますが、
本日のお題は、その十四句中にございます「五劫思惟之攝受」という句の内の、
「五劫の思惟」でございますので、
最初にこの五劫の思惟の不思議につきまして、お話いたします。
第一法話におきまして、一劫と申しますのは、一説には梵天の半日（一昼）、
約四十三億二千万年とされております、とご説明いたしました。
しかし劫には様々な考え方がございまして、
他には磐石劫とか芥子劫などとも謂われているのでございます。
例えば磐石劫につきまして申し上げますと、
一由旬とは約七キロメートルと言われておりますが、
一辺がこの一由旬の立方体の大きな岩があるといたします。
そして、天人が百年に一度天から降りまして、
その軽い羽衣で、その一由旬立方の大きな岩を撫でます。
このように羽衣で百年に一度撫で続けましたために、
大きな岩が擦り切れてなくなってしまいましても、一劫はまだ終わりません。
これを磐石劫と申します。
また芥子劫につきまして申し上げますと、
一由旬は約七キロメートルでございますので、
百由旬は約七百キロメートルでございます。
その百由旬四方の大きなお城を、沢山の芥子の種で満たします。
そして、百年に一度、一粒の芥子の種を取り続けます。

このように致しまして、芥子の種が全部なくなってしまいましたが、一劫はまだ終わりません。これを芥子劫と申します。

また塵點劫、微塵劫というのもございまして、塵點劫は教行信證の行文類の元照釋文に、微塵劫は同じく教行信證の行文類の用欽釋文にございます。微塵劫は塵點劫に同じく、塵點劫には三千塵點劫と五百塵點劫の二種類がございます。三千塵點劫とは、三千大千世界を磨って墨汁としまして、この墨汁を一千国土毎に一點落とし、墨汁の尽きました時、それまで経過しました世界を砕きまして、その一塵を一劫として数えた総数の劫でございます。また五百塵點劫と申しますのは、五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を砕いて微塵としまして、その微塵を五百千萬億那由他阿僧祇の国土毎に一つ落とし、その微塵の盡きました時、それまで経過しました国土を砕いて微塵とし、その一塵を一劫として数えた総数の劫でございます。

そして「五劫の思惟」の五劫とは、この想像を超える長い時間である一劫の五倍でございますから、実に計り知れない程の長い時間なのでございます。阿弥陀如來は、法蔵菩薩というお姿で、この五劫の間お考えになり、多くのお浄土の中から善いものを選び取られたのでございます。

阿弥陀如來の無量の光、無量の命と申しますのも、大変不思議なことではございますが、中でも特に不思議なお言葉は、本日のお題である、この「五劫の思惟」でございます。今ほどご説明いたしましたように、五劫とは、ほとんど無限に近い量の、計り知れない程長い時間なのでございます。果たして人間が、このように無限に考え続けることができるためには、どのようにすればよろしいのでしょうか。また、法蔵菩薩のお姿をとられた阿弥陀佛のこのような無限の思惟の結果としての「南無阿弥陀佛」のお念佛とは、どのようなお言葉なのでしょう。この問題を考えるにあたりまして、

無限について幼い頃に考えましたことを、
少しお話させていただきたいと存じます。

私が無限のことを知るようになりしたのは、八才の時のことでした。
八才の時、私は祖父から、大きい桁の数のことを教わったのでございます。
最初が一、次の位が十、その次の位が百、と始まりまして、千、万、億、兆、
京、垓、秭、穰、溝、澗、正、載、極、恒河沙、
阿僧祇、那由他、不可思議、と続きまして、
最後の数が、無量大数でございました。
後に私は、無量大数よりも更に大きな数があるという事実を知りました。
しかし、八才の私にとりまして「無量大数」とは、
ほんの幾つかの漢字で表現された極めて大きな桁の名前、
計り知れない無限に近い量の数を表す、夢の言葉でございました。
以来「無量大数」は、私の極めてお気に入りの言葉となりました。

それから後の或る時、私は祖父に教わった、一から無量大数までの桁の数を、
自分で小さな紙に書き、特に大好きな「無量大数」の文字を、
じっと見つめておりました。その時、不思議な事実思い当たりました。
無量大数は、定めることのできない無限に近い量の巨大な数のはずなのに、
何と私の書いた「無量大数」という小さな漢字四個の中に、
静かに綺麗に収まっているのでございます。
殆ど無限に近い大きなものが、
たった四個の小さな文字の中に、すっぽりとはめ込まれている、
何という不思議なことだろうか、と私は気づきまして、
しばらく驚きの余韻に浸っておりました。

これが私の子供の頃の、無限についての思い出でございます。
極めて小さなものが極めて大きなものをその彼方に秘めているという事は、
その後も光と影の対のように、
幾度となく明らかになるのでございました。一つ例を挙げますならば、
庫裏（庫裡）での茶道のお稽古におきまして、
無限についてほぼ同様のことを見出したのでございます。庫裏のお茶室には、
棒で突き上げて東からの明かりを取る、竹で組んだ連子窓の隣に、
躡口（にじりぐち）がございまして。お茶事の度ごとに、露地から身を低くして
躡口を潜り、四畳半の仄暗いお茶室に入りますと、
見慣れているはずの四畳半のお茶室の空間が、

表面上の広さや狭さの観念では計り知れない、
外の世界とは異質な広がり帯びるのでございます。
それはお佛間、つまり佛様のお部屋とは異なる空間であるのにも拘らず、
ややもすればお佛間に極めて近い空気の
微細な空間に、心々に転換されるのでございます。
実際、維摩居士が方丈の狭いお部屋の中に
三万二千の座席を収めることができたという
維摩経（大乘経典）のお言葉と、易経、礼記等の陰陽五行になぞらえまして、
茶道の開祖でいらっしゃる村田珠光は、四畳半のお茶室をお作りになり、
その四畳半の中に無限の広がり表現しようとなさったそうでございます。

ここで申します無限の広がりとは、物理的な広がりであるとは限りません。
大老の井伊直弼の書かれた『茶湯一会集』の中の有名な詞に、
「独座観念」という詞がございます。
「独座観念」とは、独り座って念を観ると書かれている
文字の通りでございまして、
念を観るとは即ち、心を観ることでございます。
お茶事が終わった後、お茶事の主催者である亭主は独りお茶室の空間に座り、
自分の心を観察する、ということでございます。
私は、お茶室の空間の無限の広がり申しますのは、
物理的な広がりではなくて、
実は無限の心の広がりのことなのだ、と考えるのでございます。
一見有限、つまり限りあるように見えております空間も、
心においては無限である、ということではなかろうか、
無限の心の広がりとは、無限の思惟の広がりのことであるから、
これは五劫の思惟に通じる考え方ではなかろうか、
と私は考えているのでございます。

先程私は、子供の頃に、
無量大数は、定めることのできない無限に近い量の大きな数のはずなのに、
私の書いた「無量大数」という小さな漢字四個の中に、
すっばりと静かに綺麗に収まっているという
事実に気付いた思い出をお話いたしましたけれども、
今程申し上げました、四畳半のお茶室の空間に
無限の心の広がり収めるということは、
「無量大数」という四個の漢字の中に無量大数という概念を収めることと、

考え方としては同じなのでございます。
また、数学などにおきましても、直線の上にごございます一つ一つの点は
大きさを持たないものとされておりまして、
長い線の上にも、また短い線の上にも、
同じく無数の点があると考えられているのでございます。
言い換えますと、ほんの短い時間の中にも、無限は宿るのでございます。
ですから、僅かな寿命しか持たない人間も、
無限に考えることは可能だ、と私は考えるのでございます。
「五劫の思惟」というお言葉は、
最も小さいものの中にも無限の大きさが宿るという事実を、
そのお言葉の彼方に秘めていらっしやいまして、
その事実を私共に、密かに示して下さっているように、私には思われます。

これまで「五劫の思惟」と「無量大数」を例としてご説明いたしましたが、
それらの言葉以上に、極めて不可思議なお言葉がございます。
それは「南無阿弥陀佛」というお念佛のお言葉でございまして、
どの言葉よりも遥かに不可思議なお言葉なのでございます。
「南無阿弥陀佛」という名號は、
御佛の五劫兆載永劫の思惟の結果のお言葉でございまして、
「南無阿弥陀佛」の六字の御名とは、
あたかも極大のものが極小のものの中に顕現するように、
御佛の無限の全生命とお力とをその内に秘める、
すべての功德のまどかに満ちる不可思議なお言葉なのでございます。

教行信證の行文類の元照釋文に、
「萬德揔彰於四字。」
同じく行文類の戒度釋文に、
「佛名乃是積劫薰修、攬其萬德總彰四字、」
とございますように、
あらゆる功德は残らず阿弥陀佛という名號、
つまりお念佛に表彰されるのでございます。
阿弥陀佛の名號は、永劫の間、修行の功を積み重ね薰修されたもので、
あらゆる功德はそのまま
阿弥陀佛の四字にあらわれているということでございます。
[梅原眞隆選集『親鸞教學』(昭和二十七年十月廿五日發行)中の
「教行信證の中心問題」(昭和四年二月、京都帝國大學の樂友會館において

開催された眞宗學研究所の公開講座における速記録)]

また教行信證の行文類の元照釋文に、

「況我彌陀、以名接物是以耳聞口誦无邊聖德攬入識心、永爲佛種、頓除億劫重罪、獲證无上菩提。信知、非少善根、是多功德也。」

同じく行文類の用欽釋文に、

「今若以我心口稱念一佛嘉號、則從因至果、无量功德、无不具足。」
とございますように、

この名號のいわれを耳に聞いて信じ、口に稱えるならば、
名號にそなわる限りのない気高い功德が心に取り入れられ、
それが永く佛になる種、すなわち信心となって、
一念のたちどころに億劫の間迷わねばならぬ重い罪を取り除け、
やがてお浄土に往生して、无上菩提の佛果をさとるのでございます。

[梅原眞隆『教行信證新釋』卷上(昭和三十年十一月二十日發行)

梅原眞隆選集『眞宗提要』(昭和二十六年一月一日發行)中の

「教行信證概説」(大正十四年十月公開講座の速記録)

梅原眞隆選集『親鸞教學』(昭和二十七年十月廿五日發行)中の

「聖化の五層態」(大正十四年十一月)]

今まで申し上げましたことを簡単に一つの文章でまとめますと、

「南無阿彌陀佛」の六字の名號をいただくことによって、
御佛の五劫の間の無限の思惟と
御佛の全生命が、限りある命の私共の内に現れる、ということでございます。
御佛からお念佛をたまわり、
御佛の無限の生命と力を受け継いで永劫に生きることが、
滅びゆく私共の、眞実に無限に生きる道なのでございます。

それでは、お正信偈の最初の十四句のご説明をさせていただきたいと存じます。

[梅原眞隆『大藏經講座 17 正信偈・歎異鈔講義』

(昭和八年五月十五日初版發行)

第一章 歸敬 第二章 因位の本誓 第三章 難思の光耀]

お正信偈の本文の冒頭、

「歸命無量壽如來 南無不可思議光」からご説明いたします。

「無量壽如來」と申しますのも、「不可思議光」と申しますのも、
共に阿彌陀佛のことでございます。

法性法身の御佛とは、本来無色無形の純粹の法界でございまして、

数量的な制限を遥かに超越なさっています。
この無量にして無限なる一如としての御佛を、
御かたちや御名前として讃嘆すべく、
御佛の不可思議の四十八願の内の、
光明無量の第十二願と寿命無量の第十三願を
あらわしたまえる御かたちを（一念多念文意、唯信鈔文意）、
「無量壽」とも「不可思議光」とも表現なされるのでございます。
無量の壽命は、過去と現在と未来の三世を貫き、
無量の光明は、あまねく十方世界を貫きます。

無色無形の本然態としての一如の御佛も、
御かたちと御名前のある顯現態としての佛體の御佛も、
御名前を信知し稱えることの比較的容易な念持態としての名號の御佛も、
三様態とも眞実の御佛でございまして、
同一のものが異なる在り方を取っていらっしゃるのでございます。
第一法話にてお話いたしましたお浄土も同様に、
無相寂靜の空相のお浄土も、
相のある現相の廣大無邊際のお浄土も、
相を現じた有邊の、即ち指方立相の煌らかに美しい西方浄土も、
その価値と本質におきましては、三様態とも同一に眞実なのでございます。
（第一法話の註に記しております。）

[梅原眞隆選集『眞宗提要』（昭和二十六年一月一日發行）中の
「教行信證概説」（大正十四年十月公開講座の速記録）
梅原眞隆選集『親鸞教學』（昭和二十七年十月廿五日發行）中の
「聖化の五層態」（大正十四年十一月）、
「浄土觀」（昭和三年十二月）
「教行信證の中心問題」（昭和四年二月、京都帝國大學の樂友會館において
開催された眞宗學研究所の公開講座における速記録）
梅原眞隆選集『眞宗の教旨と實踐』（昭和二十九年七月廿五日發行）中の
「如來の三様態」（昭和三年七月公開講座の聞書）
梅原眞隆『教行信證新釋』卷中（昭和三十二年四月十五日發行）中の
信文類 大信嘆釋]

そして、「歸命無量壽如來」の「歸命」と
「南無不可思議光」の「南無」は同じ意味のお言葉でございしますが、
これは他力廻向の信心を表すのでございます。

即ち、神秘の聖なる扉は、鍵や腕の力でひらけるのではない、
内側からひらけてくる、という、他力廻向の信心のことでございます。

では、次の行に参ります。

「法藏菩薩因位時 在世自在王佛所 覩見諸佛淨土因 國土人天之善惡
建立無上殊勝願 超發希有大弘誓 五劫思惟之攝受 重誓名聲聞十方」
の段に入ります。

阿弥陀如來は、先ず「法藏菩薩因位時」、

法藏菩薩という因位のお姿、この因位と申しますのは、

菩薩が佛に至る段階のことでございますが、

その法藏菩薩の因位のお姿を現されます。

本来、御佛には色も形もございません。

色もなく形もない御佛を、私共の信心の対象として仰ぎ見ることは、
大変難しいことでございますので、

私共の信心の対象となり得るように、方便として名前と形を現され、

御佛の本願を佛格としてあらわされましたのが、

法藏菩薩である、とされているのでございます。

太古の昔からの御佛が、人間に御佛の存在を知らせるために、

人間のわかりやすいお姿を現されたのが、法藏菩薩なのでございます。

そして、次の行の「在世自在王佛所」、

阿弥陀佛が法藏菩薩のお姿として現れたまいりました時、

法藏菩薩のお師匠さまの佛様でいらっしゃる、

世自在王佛のみもとにあらせられました。

次の行の「覩見諸佛淨土因 國土人天之善惡」、

つまり多くの御佛のいらっしゃるお浄土の成り立つ原因、

それらのお浄土に生まれる原因、それらのお浄土のお国柄、人柄の善惡を
詳しくご覧になりました。そして先程ご説明いたしました、

「五劫思惟之攝受」、この五劫の間お考えになって、

多くのお浄土の中から善いものを選び取られました。

そして次の行の、「建立無上殊勝願 超發希有大弘誓」、

即ちこの上もない世に超え勝れた誓願を起こされて、

一切の衆生を救わんと志されたのでございました。

そして、次の行の「重誓名聲聞十方」、南無阿弥陀佛という名號を、

東西南北の四方、東南、東北、西南、西北の四方向、それに上下を加えまして、

合わせて十方の、すべての人々が聞信するだけで、

すべてが救い取られることを、重ねてお誓いになられたのでございます。

次の行に参りまして、

「普放無量無邊光 無礙無對光炎王 清淨歡喜智慧光 不斷難思無稱光 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照」につきまして解説いたしますと、阿弥陀佛は、至る所に無量光、無邊光、無礙光、無對光、光炎王、清淨光、歡喜光、智慧光、不斷光、難思光、無稱光、超日月光の十二光を放たれまして、塵のように数多き國土を照らされます。

すべての生きとし生けるものは、

この御佛のみ光のお照らしを蒙って救われるのでございます。

この十二光を一つ一つご説明いたしますと、

先ず「無量光」とは、過去、現在、未来の三世をお照らしになって、あらゆる時間に存在する衆生をお救いになること、光明が時間的に無限であることを象徴されたものでございます。

「無邊光」とは、十方の世界を至らぬ隈なく照らされること、光明が空間的に普遍であることを象徴されたものでございます。

「無礙光」とは、この大きな慈悲の光明の前にはどんな障害もあり得ないことを示されたものでございます。障害と申しますのは、煩惱、悪業の類でございます。

そして「無對光」とは、阿弥陀佛の光明には対比すべきものがないことを示されたものでございまして、

「光炎王」とは、阿弥陀佛の光明が諸佛の光明に超えすぐれていらっしゃることを示されたものでございます。

「清淨光」、「歡喜光」、「智慧光」とは、それぞれ衆生の煩惱である貪欲、即ちむさぼり、瞋恚、即ち怒り、愚痴、即ち愚かさや無知を治す、光明の能力を示されたものでございます。

「不斷光」とは、光明が不斷にお照らしになること、「難思光」、「無稱光」とは、あらゆる固定的、限定的な觀念を超越された、真実の御佛をあらわす光明でございます。

「超日月光」とは、太陽や月を超えた、最も完全な光明を示されたものでございます。

この「十二光」もまた、光明が、時間的にも空間的にも、またその能力においても、無限であることを象徴しております点では、

先程の「無量壽如來」、「不可思議光」、「五劫の思惟」と同様でございます。
本日は、「五劫の思惟」というお言葉は、
最も小さいものの中にも無限の大きさが宿るという事実を、
そのお言葉の彼方に秘めていらっしやいまして、
その事実を私共に、密かに示して下さっているようだということ、
そしてそれ故に私共は、五劫の間、無限に思惟された御佛の名號、
南無阿彌陀佛をいただくことができるということ、
古い記憶に基づき、お話いたしました。
本日の要点を短くまとめますと、
御佛の五劫兆載永劫の思惟の結果としての、不可思議な
「南無阿彌陀佛」の六字の名號、お念佛をたまわることによって、
御佛の五劫の間の無限の思惟と
御佛の滅びない全生命が、私共の内にあらわれるということでございます。

このように、御佛のお言葉には、
ほんの幾つかのお言葉の中にも無限が満ちておりまして、
その深みに、隠れた意味を秘めるものなのでございます。
現代は、大量の知識が世に溢れる
教養豊かな良い時代となりましたのにも拘らず、
お念佛の南無阿彌陀佛の六字の御名が
御佛の生命であり真実の白道であるという事実を
知る方々は、実に少なくなりました。
極大のものが極小のものに顕現するように、
御佛の無限の命と力を秘めるお念佛をたまわって永劫に生きることが、
僅かな寿命しか持たない私共の、真に無限に生きる道なのでございます。

註

「父母未生以前」と申します時の「父母」とは、
現生の父母に限らず、一切の相対的なものを指します。
歎異鈔の第五条の父母孝養の解釈におきましても、
「父母」とは現生の父母に限らず、
一切の有情、一切の衆生を指すのでございます。
「父母未生以前」の世界とは、相対の未だ分かれぬ以前の世界、
主観と客観未分の世界を表すのでございます。

2008年 遠霞

京都・顕真学苑副幹（顕真）